

■おきなわ環境ネット■

沖縄環境ネットワーク通信 31号

31号

Is there time left in okinawa?



-
- | | | |
|---------------------------|---|--------|
| 南部一般廃棄物最終処分場建設計画についての経過報告 | … | 大城 順子 |
| やんばるコーディネートの一日 | … | 酒井 哲哉 |
| シンさんの辺野古日記より | | |
| ジェス・サンチャゴさんを迎えて | … | 内海 正三 |
| エコツーリズムでの村おこしをめざして | … | 仲西 美佐子 |
| 2005 年度総会報告 | | |

《環境情報おきなわ》

いつまで続くこのドタバタ劇…

～南部一般廃棄物最終処分場建設計画についての経過報告～

大城 順子（沖縄環境ネットワーク世話人）

3 年ほど前、筆者の住む沖縄県南部・玉城（たまぐすく）村当山区の用地への、南部地区十市町村の一般廃棄物処分場建設計画が持ち上がったが、紆余曲折の末、そのときは白紙撤回となった。その後、以前にも誌面でお伝えしたように、「南部地区廃棄物処理施設整備推進協議会」（以下「南廃協」と略）という新しい組織が立ち上がり、今年一月から新たな処分場建設候補地の絞り込み作業が始まった。

今回の計画は、前回の失敗を教訓に仕切り直して行われるはずであった。が、学識経験者や住民代表、そして施設（灰溶融炉導入の被覆型最終処分場）の決定があまりにも不透明であったことから、前回の教訓を活かしてほしいと考えていた筆者は、住民委員会の委員公募に応募して委員になった。

しかし住民委員会が開かれるやいなや、別の委員から「当山区に造れなければどこにも造れない」「ホテルのような立派な施設なら当山区に造らせてもいいのでは」などという暴言も聞き、前回の失敗は何だったのかと不信を感じつつ委員会で発言し、また候補地の中から3ヶ所に絞り込みを行う第一部会（施設建設選定部会）の傍聴もし、住民説明会への参加もしてきた。そこで目にしたのは、住民の声を完全に無視して計画を進める南廃協のやり方だった。

今年1月、南廃協事務局と各市町村の助役および担当課長がヒアリングを行い、当該の十市町村からそれぞれ一ヶ所ずつ候補地を選定した。その中には住宅地や病院、学校などに隣接した地区、また全国名水百選にも選ばれた河川に水源地にあたる箇所など、処分場建設と適地とは思えない場所も含まれている。

前回の計画で適地とされた当山区の用地が今回の候補からはずれたのはほっとしたが、日本名水百選の「垣花樋川」が候補地とされているのにはさすがに驚いた。しかし、当時の事務局室長が、長野県中信地区の選定方法（負担の公平と世代間の平等を最優先に、公正公平なルールのもとすべての情報を公開し、用地選定や絞り込みを行う方法）を採用していることを住民委員会で断言していたので、5ヶ所に絞られる段階で確実に候補からはずれるに違いないと信じていた。



候補地のひとつ「垣花樋川」へ降りる道。ここに処分場とは…

ところがその室長が4月に移動になったことから、後任の室長にあらためて絞り込みの方法を確認した。すると「処分場は迷惑施設ではないと考えている。前任者に会ってなぜ中信地区の方法を採用していると言ったのか（前任者にあなたが）聞いてみて下さい」と言う。さらに候補地の地番について問うと、「地質調査をやって岩盤が見つければ用地をずらしていくので答えられない」とのこと。こんないいかげんなやり方で住民の理解が得られると思っているのだろうかと思腹が立った。

5ヶ所に絞り込む前に行われた住民説明会では、住民から「名水百選の水源地が汚染される」「住宅地に近すぎる」など、環境面への不安の声があがった。これに対して事務局長は、「みなさんの声をこれからの絞り込みに反映させます」と約束したが、第一部会の各委員の参加はほとんどなかった。

そのころ、第一部会の委員で糸満市出身のS氏が委員を辞任し事務局側に移った。そして機会あるごとに「処分場は迷惑施設ではない」と私を説得しはじめた。あまりのしつこさに「それほど迷惑施設ではないと言うのなら糸満市に建設しなさい」と反論すると、「どうして玉城には造れないのか」と言い出す。その不可解な言動に、いよいよ何かあると感じた。

7月はじめ、候補地を5ヶ所に絞り込む会議が第一部会で行われた。絞り込み作業はすべて第一部会が協議をして行うものだと思っていたが実際は違った。各委員の現地踏査の採点結果（評価項目事にABCの三段階で採点）を事務局がまとめ、点数順に上位5ヶ所を委員に提



候補地の周辺には反対の立て看板も出始めた

示し、それを全委員がなんの協議もせず承認しただけであった。その中に前述の垣花樋川も含まれていた。「この絞り込みには住民の声が全く反映されていない」との委員からの声に、「3ヶ所に絞り込む段階で反映させます」と事務局。結局、住民の声が反映されていない候補地選定評価基準結果を非公開とし、5ヶ所の候補地名（糸満市真栄里・東風平町外間・具志頭村安里・玉城村垣花・西原町小那覇）だけを公開することとなった。そしてここから3ヶ所にへの絞り込みには改めてルールを決め、ここから住民の声を反映させることが確認されたが、先の住民説明会で事務局長は、住民の声を絞り込みに反映させるとしながら完全に無視した。

7月11日、5候補地の行政担当者および議員らへの説明会が開かれた。先日の第一部会で非公開にすることにした候補地選定評価基準結果を事務局がスクリーンに映し出して説明をはじめたが、すぐに「その資料を配布して説明しろ」「これは点数だけの評価。住民にどう説明できるのか」「事前告知が遅すぎる（午後一時からの説明会の開催を当日午前10時にアナウンス）」などの批判が相次ぎ、散々な説明会となった。

7月19日に開かれた第一部会では、11日の説明会の際、非公開にすることに決めた評価結果を突然スクリーンに映し出した事務局の行為に、「事務局の真意がわからない」との不信の声があがった。「得点の最も高い用地が将来建設地に決まるに違いないと思われてはいけなくて非公開にしたのに、どうしていまここで公開するのか」と事務局を責める委員の声を聞いて、意図的に公開したのではないかという疑念が頭をよぎった。複数の委員から「絶対NOだ」というところを理事会に上げては大混乱するだけ。合意を得られたところを上げていかなければいけない」との声も上がった。

今後、絞り込まれた各地区で地域説明会や第一部会との意見交換会も予定されているが、このようなやり方で計画を進める姿勢に、果たして住民の理解は得られるの

だろうか。各候補地に隣接する病院や企業などからも次々に説明会の要請が行われていて、先行きは不透明である。

住民説明会への参加もせず、現地踏査の際には名水百選の現場も見ないで点数だけで評価した第一部会の委員や、結局地域住民の声を無視した事務局には強い不信感を持っている。

県内ごみ処理施設に隣接する地域の住民と意見交換したが、「環境アセスメントでOKが出れば、住民の合意が得られなくても建設できる」と虚偽の説明をされて、施設を押し付けられるケースもあったらしい。気をつけなくてはなるまい。

なお、最後の3ヶ所から1ヶ所への用地の決定は、当該十市町村の首長と議会議長で構成される理事会が行うことになっているが、それが公開となるかは今のところ不明である。

住民説明会の見送りを報じる地元紙

南廃協

住民説明会を見送る

玉城村垣花 最終処分場問題で

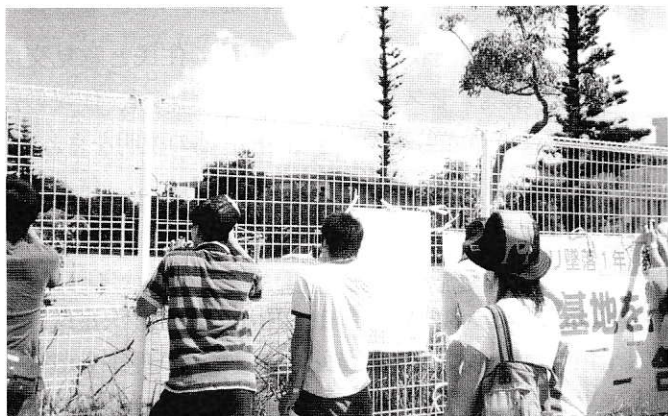
【南部】南部地区最終処分場建設地の選定作業を進める南部地区廃棄物処理施設整備推進協議会（南廃協）は玉城村垣花地区での住民説明会開催を見送った。同地域は五ヶ所に絞られていた最終処分場候補地の一つ。処分場建設に強い反対がある中、住民説明会の開催に住民の理解が得られていないのが大きな理由。南廃協は「住民説明会は説明責任を果たす大事な手続きだが、説明会に関する確固たる規則はない。側は、村に対して受け入れられない方針を伝える。次段階の意見交換会の開催は選定作業に欠かす、地元理解を得た」と話している。候補地に絞られた経緯や選定スケジュールなどを説明する住民説明会は八月までに他の候補地の西原町小那覇、糸満市真栄里、東風平町外間、具志頭村安里の四地区ですべてに終わっている。南廃協は八月末に玉城村を通して垣花地区での開催を依頼したが、地元側は「四地区で実施して玉城村が実施を拒絶するのは南廃協立ち上げの趣旨に反する」と指摘した。六日に開かれた島尻消防清掃組合議会（屋比久清正議長）の一般質問で、知念昭則東風平町議員は「四地区で実施して玉城村が実施を拒絶するのは南廃協立ち上げの趣旨に反する」と指摘した。

大城晃玉城村長は、六月に一度、候補地十ヶ所に選定に関する住民説明会が村内で開催され、事業内容も示されたことを説明。その上で「地域が門戸を閉ざしている中で、説明会は開けないのでは、月中の決定を目指す」と述べた。南廃協は当初、九月までに最終候補地を決定する方針だったが、地域説明会のスケジュール調整などでずれ込み、来年三月中の決定を目指す。

壊れゆく沖縄を見に行く…

やんばるコーディネートの一日

酒井 哲哉（事務局）



ヘリ墜落現場を見る。正面に被害を受けた建物が建っていた

毎年夏休みになると、環境問題を学習・実践している大学などのゼミやサークルから、沖縄の環境問題について現場を見ながらレクチャーしてほしいという依頼を受ける。今年も京都の龍谷大学の学生が中心となって組織されている「龍谷大学ボランティア・NPO 活動センター」からその依頼があった。ここは、一昨年から3年連続で沖縄を訪れ、沖縄環境ネットワークやその他の団体のコーディネートのもと、様々な現場を視察している。今回もまた、「普天間基地」「辺野古海上基地建設予定地」と、本島北部（やんばるエリア）・大宜味村の「大保（た いほ）ダム建設現場」と、同村の「塩屋湾埋立て現場」を見たいとの申し出があったので、同行して現地がいまどういう状況になっているのかを見てくることとした。

8月23日、宜野湾市の「嘉数高台」（かかずたかだい）でメンバーたちと合流する。ここは普天間基地の全体を見るのに適した場所だ。今回来沖した11人のメンバーとともに、高台の展望台から普天間基地を俯瞰する。いつ見ても巨大な基地はそれが存在する宜野湾市の全面積の60%にもわたる。そのすぐ横に、昨年の夏、ヘリが墜落した沖縄国際大学の建物が見える。「近いなあ…」思わずひとりがつぶやいた。

その場で学生からの様々な質問に答える。日差しが高くなってきて、じりじりと太陽が肌に痛い。去年のあの墜落の日も暑い日だったな、と思い返す。もうあれから一年も経ったのだ。

30分ほどその場でレクチャーしてから、沖縄国際大の墜落現場へと移動する。ここに来るのは久しぶりだった

が、以前来たときとは明らかに風景が違っていた。つい最近、直接被害を受けた本館の建物は撤去され、整地されていたのだ。わずかに焼け焦げた樹木だけが当時の面影を残している。解体した壁の一部は大学内に保存されるらしい。実際、この建物の保存をめぐる大学内外で賛否両論が飛び交った。保存のための署名活動も盛んに行われていたが、それが実ることはなかった。大学としては、「墜落」のイメージを早く拭い去りたかったのだろう。地方の私立大学として学生を呼び込まねばならない立場は理解できなくもない。しかし…。

微妙な感情を残しつつ、その場を離れる。これから向かうのは名護市辺野古の海上基地建設予定地だ。正午まえ、現場に到着。昨年も同じ時期にここを訪ねたが、そのときは風が強くテントがたたまれていた。昨年と場所は移動したが、今年はちゃんとテントが立っている。辺野古にしては風も弱めで天気は良く、海も青い。リーフの先端に立てられた足場がよく見える。そこには反対する人たちが24時間体制で張り付いている。

テントには10数人の支援者たちが思い思いに時を過ごしている。学生たちは置かれた資料などを見ながら、その人たちにいろいろ質問し自分の意見を述べる。

支援者の中に人権派の牧師である平良修さんが来られていて、丁寧に質問に答えて下さった。平良さんは奥さんと一緒にほぼ毎日、現場から30分以上かかる沖縄市の自宅からここに来ている。奥さんは毎日、海の上の足場で反対を訴えている。70歳を過ぎているお二人にとってどれだけ過酷なことか想像に難くない。



海上基地建設現場の海岸。この日は海がきれいだった

はじめはどことなく観光気分の抜け切れなかった学生たちが、話を聞いていくにつれ、表情が変わっていくのがわかる。自分があまりにも何も知らないことに対する驚き、それが自身の中に広がっていくのだろう。

約2時間、この現場で話を聞き、海岸に出て基地の予定地であるリーフを眺めた。彼らにはどのような感情が残っただろうか。

午後2時、辺野古を離れ、本島北部の大宜味村へ向かう。村の南部にある塩屋漁港で、大宜味在住のハルサー（農業をする人のこと）である儀保さんと合流。毎年、このエリアの案内をして下さっている儀保さんとは旧知の仲だ。ここから、いま建設中の大保ダムを見学に行く。

時間の関係で、その前に漁港の海岸で地元のウミンチュ（漁師のこと）である名嘉さんにレクチャーを受ける。背後には昨年からの工事の始まった埋立て地が見える。沖縄中のそれが集まっているのではと思えるほどたくさんのダンプカーが、引っこり無しに行き来している。

現在、ようやく予定の4分の3ほどの埋立てが終わり、いま最終部分に入っているとのことだが、それにしてもやたらと広い。



あまりに巨大な埋立て現場

こんな広大な埋立て地を造っていったい何に使うのかと言えば、町民体育館、中学校、それにJAの倉庫などというものが予定されているらしい。しかし、すぐ近くにある既存のJA倉庫はいまでもガラガラの状態で、なぜもっと必要なのが全くわからない。町営施設にしても、今後村の人口が増えることを前提に計画されているというが、いまでも人口の流出が止まらないこの村が、なぜ人口を増やせるのか、合理的な説明は全くつかない。まさに「埋立てのための埋立て」としかいいようのないものだ。

この埋立て用の土は、見学に行く大保ダムからの土である。町長は「一石二鳥」などと言っているそうだが、一時の公共事業で瞬間的に潤ったあと、これが完成した

ら業者たちはいったいどうするのだろうか。

疑問だらけの埋立て地を眺めながら、このダムのために新たに造られた取付道路（これも公共事業だ）を通してダム建設現場へと向かう。一応村道ではあるのだが、我々の乗ったバスのほかは1台も普通のクルマは走っていない。すべて土砂運搬用のダンプである。一種異様な光景だ。

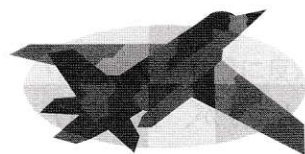
途中、水没予定地にある大保川本流の沢に下りてみる。ダムを造るといって、どれほど大きな流れをせき止めるかと思われがちだが、実際には拍子抜けするほどの小川で、せせらぎと言った方が実態に近い。いつもここに来ると、靴を脱いで水に入ってもらい、この自然を体感してもらうことにしている。樹木に日差しが遮られて、昼間でもひんやりしている。本当にオアシスのような場所だ。ここが数年後には水没してしまうと思うと残念でならない。

沢で小一時間ほど心の洗濯をしたあと、ダム建設現場が見える場所に移動する。しかし、去年に比べて道路わきの遮蔽壁が高くなっていて、あまり現場が見えなくなっていた。どうも見られてはまずいと思っているのだろうか。何だか納得がいかない。儀保さんによると、まだ本体工事は始まっていないそうだが、そんな時点でもすでにかなりの樹木が伐採されているのが確認できる。果たしてこのダムが、本当に必要なのだろうか。

再び海の方に降りてから、最近できたばかりという人工ビーチで小休止する。小綺麗にレイアウトされたビーチの砂は、何でも那覇港の沖合の環礁からわざわざ運んできたものだそう。何のためにこういうことをするのか、私の頭では理解できない。

見学予定のポイントを全て見終わると、すっかり夕方になっていた。毎年案内をするたびに、沖縄のいろんな場所で自然が少しずつ、しかし確実に壊されていくのを目の当たりにする。本当にこれが必要なのか、誰も真剣に考えないまま、自然だけが痩せ細っていく。そして最後には何もなくなってしまう。「観光立県」と言うが、そんな沖縄にいったい誰が来るというのだろうか。

いいかげんに目を覚まさなくては、自分たちの足元すら危くなるというのに…。帰りの海は夕焼けに映えて美しかったが、心は晴れなかった。



「シンさんの辺野古日記」より

名護市辺野古の在沖米軍海上基地建設予定地で、反対運動を続けている富田晋さんの日記からの抜粋を今回もお届けする（一部、編集部で手を加えています）。

なお、この日記はインターネット上で公開されている。
アドレスは<http://diary5.cgiboy.com/2/henokonikki/>

9月1日(木) 阻止行動座り込み 501日目

・台風13号と14号が接近しているため、辺野古の海上は荒れています。風速20メートル、波が6メートルという状況で、防衛施設局側も作業船を出せない状況です。

この間の辺野古の状況

この間も1、2、3、5の各ヤグラは、那覇防衛施設局長の「ボーリング調査が終了するまでヤグラを撤去しない」という発言に抗議し、全ての作業を拒否しています。ただし、赤旗と安全灯の交換は船舶の航行上の問題があるため従来どおり認めています。

8月中はたくさんの台風が沖縄近海を通り過ぎていきます。その関係で、防衛施設局はヤグラでの作業よりも台風対策用の補強器材を入れる作業が先行しています。8月中、ほとんどの日はヤグラに補強器材が入れられている状況が続き、「補強器材を入れているあいだはヤグラでの作業は一切しない」との双方の約束の下で一切の作業は作業船が海上に出てくるものの阻止され続けています。

政府が衆院議員解散という動きがある中で9月に予定されていた「2プラス2」（日米閣僚級再編協議）が1月にずれ込むということがあります。衆院が解散状態にあるため辺野古への指示を行っている国（閣僚）もそちらに追われているのか、辺野古での動きはほとんどないと言って言い状況です。

今回、「2プラス2」が行われるということがありますが、私はこれで辺野古新基地建設の問題が動くというのは微妙な問題であり、数年は続くとする意見のほうが信憑性があるように感じています。辺野古の海上行動隊もそのように受け止めています。「2プラス2」でこの問題がなんらかの形で動いたとしてもそれが私達にとって有利になるものでは決して無いということは頭に入れておかなければなりません。

再度確認していることですが、全国の人たちの支援、沖縄の8割の支持、おじい、おばあの8年間の闘い、陸

上、海上での阻止行動の500日以上に及ぶ闘いによって日米政府が追い込まれていることは変わっていません。私達は杭一本海上に打たせていないのです。それは国策を止める、未来を作るという大きな希望を繋いでいます。辺野古の海上では、現在も命がけで基地建設を止め続けている現実が続いています。

「500日集会」

8月31日(水)で辺野古の阻止行動が500日になり、名護市役所前の中庭で「500日集会」が行われました。500日という長い時間をやり抜いてきたんだという思いと早く終わらせなければならないという思いがあります。

集会で山内徳信さん（注1）は「500日集会に拍手を送りましょう」とここまで続けてきた自分達の力を再確認していました。集会に参加した400人の拍手は自信に溢れているものでした。反対協（注2）の大西代表は、「600日集会はしない。それまでに絶対に終わらせよう」と訴えました。その通りです。絶対に基地建設を止めて600日を迎える前にうれし涙で終えたいと思いました。「命を守る会」の金城祐治代表は「米軍はやりたい放題に演習し、命の海は埋め立てられようとしている。この状況に楔を打ち、移設を撤回させよう！」と強く熱く訴えていました。そこには辺野古は、闘いは始まったばかりなんだという熱いメッセージが込められています。

これだけの期間基地建設を止め続けていることはものすごいことです。基地建設の1%にも満たないボーリング調査を杭一本打たせていないことがどれだけの希望と力を生み出してきたのでしょうか。私達はその力を新たな時代、新しい世の中を作るために使わなければなりません。

この日、今までにないことが起こりました。沖縄県内の学生達がたくさん集会に参加したのです。この思いを繋がりをお願いしたい。人として生きられる、ありのままの自分でいられる世界を作り出すために。辺野古という一点の曇りのない希望に多くの人達が繋がることを切に願います。

9月2日(金)

・防衛施設局が建てたボーリング調査のためのヤグラが台風の影響で今日一時的に撤去されました。

昨日の時点で辺野古漁港の作業船が台風のさなかなのにも関わらず降ろされ、これは「ヤグラ」の撤去ではないかという話がありました。

作業船が降ろされたことで今日の辺野古は朝から警戒していました。海上は風がじょじょに立ち始めている状況で危険でしたが、ヤグラにも午前8時ごろから座り込みのために人がのぼりました。

午前9時頃、テント村本部から「テント村に防衛施設局員と業者の責任者が来た」との連絡が入ります。無線の連絡では「今日はヤグラの撤去を行いたいとのことで交渉に来ている。ヤグラの撤去の時には人は下りてほしいということと、漁港を資材を一時的に置く場所として使わせて欲しいとのことも要求された」

今日は撤去以外の作業は絶対に行わないことを約束させ、海上行動隊は監視のための最少人数を阻止船と共に残して全体が引き揚げることを決定しました。漁港を一時的に使うことに関しては他の作業では絶対に使わせないことを通告した上で“今回に限って”OKしました。

作業は第五と第三から始まり、二つのヤグラの解体に午前10時～午後2時まで費やし、さらに第一と第二の解体も続けて行われ最終的に午前5時ごろまで作業は続けられました。

この作業を監視していた私の感想ですが、確かにヤグラはかなりの劣化が起っており、クランプ(単管の接合機材)をトンカチなどで叩くといった作業もありました。単管自体も曲がっているものが幾つもある状態でした。

ただ、ヤグラ自体はまだ持つように思えました。前に反対している人でこのような仕事をしている人に見てもらった時は「このヤグラでの作業は十分に行える。半年は絶対に持つだろう」との判断をいただきました。

その通りだったと感じています。

ヤグラ解体について

ヤグラを解体させたことは私達の阻止行動によって基地建設に伴うボーリング調査を完全に止めていることが証明されたことになります。

しかし、施設局は解体作業の交渉の際に「ボーリングヤグラは必ずボーリング調査のために必要だ。私達は必ず新しいヤグラを建設する」と言明しています。つまり、状況は私達が止めきっていることを証明していますが、阻止行動を続けていくことに何ら変わりはなく、辺野古の基地建設を完全に止めるにはまだまだ多くの人達の力と支援、全国での行動がもっとも必要だということを示しています。来週から始まるとされる新しいヤグラ建設をさせないための行動に多くの人達が参加されることを切に願います。

名護街宣大作戦

名護街宣行動は回を重ねるごとにビラを受け取る人からの反応は良くなっていきます。名護議会議員の大城ヨシタミさんの話。

「この間、ふいに市民から声を掛けられました。“街宣のことなんだけど”と言われ、文句を言われるのかと思っていたら“辺野古を訴えることは大いにやって欲しい。とても応援している。ビラを配っている人達が辺野古と分かるようにゼッケンか何かを見につけて欲しい。それを見て車からビラを受け取る方々も配慮するはずだ。”と言うのです。言葉で伝える努力がじょじょに伝わってきていることをうれしく思いますよ」とのことでした。

それを聞いて今回から首からかける辺野古へのそれぞれの思いを書いたボードを作りました。

すると、すると、すると!。今日の街宣行動の人々の反応がまるっきり違うのです。車を脇に止めて受け取ってくれる方や「こっちにもビラをくれ!!」と手を出す人も。カンパを渡してくださる方もいました。16名が参加した今日の街宣行動で全員がそのような反応を受け取り感動していました。

ビラを受け取った方で「辺野古でがんばっているおばあやおじいのことやあんたたちのことを思うと涙が出る。私も自分の出来ることを精一杯やっていくからお互いがんばろうね」と涙を流してくれた女性には、私も感極まって涙が出ました。

道行くおばあたちは「小泉をテレビで見る度にぷりぷりしているんよ。怒りがこみ上げてくるさ。この空を爆撃機で汚したくはない」「あんたたちを戦場に送るわけには絶対にいかない。わったー(私)は絶対に基地は要らないと思っているよ。わったーもがんばるからあんたたちニセーター(若者)もチバリヨ!」と声をかけてくださいました。

名護市民投票で「基地は要らない」と政府にたたきつけた名護市民は今もその思いを誇りとして名護で生きています。生活の中であらゆる政府からの圧政がある中で名護市民は「基地建設を止める、なくす」ことをあきらめてはいません。沖縄の人々は「基地は要らない」と声だかに叫んでいます。私は名護街宣に参加してもっと名護の人々の思いを知り、怒りを知り、生活の中で共に生きる中でその立場にたった言葉で訴えて行きたいと思いました。

(注1) …「基地の県内移設に反対する県民会議」共同代表

(注2) …「ヘリ基地反対協議会」のこと

ジェス・サンチャゴさんを迎えて

内海 正三（沖縄環境ネットワーク世話人）



筆者の自宅で催されたミニライブにて（最前列中央がサンチャゴさん）

フィリピンの歌手ジェス・サンチャゴさんが日本の財団の助成を受け、沖縄で4ヶ月間研究活動することになり、その身元引受人を沖縄環境ネットワークで引き受けた。沖縄にはなじみの深いフィリピンのコラソンさん（2003年に開催した国際ワークショップで、フィリピンからの報告者であった女性弁護士）の依頼で、当人も社会正義の実現にフィリピンで活躍している歌手と言うことなので、財政的な面も考慮して引き受けた。

財団との電話での打ち合わせでは、ほとんど手が掛からないとのことなので、必要な時の相談役程度に考えていた。7月12日に那覇空港にジェスさんが到着し、早速英語が堪能な櫻井世話人と打ち合わせするため沖縄大学に向かった。

移動中、今日の宿泊先を訪ねたら判らないと言う。事前にジェスさんの友人の日本の歌手から、何名かの沖縄の歌手と研究者の名前を聞いており、先ずはそのインタビューを考えているとの事。他は何も準備していない様子。沖縄では英語がある程度通じると考えていた節がある。ジェスさんは日本語が分からず、宿泊先も連絡用の携帯電話の手配も、英語が話せない者へのインタビューの予約と通訳の手配等、色々考えない

と一人では何もできない状況である。

一方、ジェスさんの友人から、以前にジェスさんのコンサートを千葉で行なったことがあり、沖縄に来ているなら是非世話をお願いしますというメールが届いた。そのメールによると、ジェスさんはマルコス政権打倒のとき、彼の歌を皆が歌いながら抗議行動を行ない、『ハリーナ』と『ピープルズ・マーチ』は民衆歌として歌われ、非常に有名な歌手との事。助成財団からも、沖縄滞在中はいろんな交流を行って下さいとのことで、当初の形だけの身元引受人からスーパーバイザー的な形に変わった。

ジェスさんは人懐っこく楽天的なので、一緒に移動するのは楽しいが、日本の物価が高いので、負担のない選択をするのが難しい。宿泊所も若者が多く集まる一泊千円ほどのドミトリーを手配したが、数十人がワササとうごめき、ひと部屋に20人がずらっと並んだダブルベッドで寝泊りしている様に、「僕のプライバシーは？」と質問された。「ここにはそんなものは無い」と答えたが、2日ほどで逃げ出した。

結局、ジェスさんは国際通りに近いマンションタイプのホテル（東南アジアからの客が多い）の個室で長期逗留することとし、沖縄での活動を開始した。

その週末に私と二人で辺野古を訪れた。台風が襲来

するのでボーリング用のやぐらはパイプだけの骸骨になっていた。港も阻止団のテントを片付け、守る会の事務所だけであった。ヘリ基地反対協の安次富さんや宮城節子さんに紹介し、早速歌を数曲披露した。素晴らしい伸びやかな歌声である。心に染み渡るメロディーと柔らかな歌声がマッチして、とても感謝された。8月末に行なわれる辺野古500日集会では是非歌って欲しいとの依頼を受けた。しばらくすると大阪の民医連のメンバー50人ほどが交流に訪れ、折角だから彼らにも歌って欲しいと依頼された。突然だがジェスさんは嫌な顔もせず、台風の影響のある港で再度2曲歌った。風が砂を巻き上げ、時折強い日差しが降り注ぐ悪条件でも、さすがにプロだと感心させる歌声だった。時間の節約で辺野古との往復は有料道路を使用した。台風の余波の横風が時折車を横に滑らせ、運転には神経を使う状況であった。助手席から時折英語の質問が飛ぶので、頭がうまく切り替えられず、「命どう宝」で時々質問を無視して運転に集中した。

その後、沖縄音楽の研究と言う事で、県立芸術大学の久万田さんと金城厚さんに沖縄音楽の歴史と現代音楽の特徴についてインタビューした。喜納昌吉さんはアメリカ帰りの強行日程の中、彼のライブハウス「チャクラ」で沖縄音楽の社会運動における影響についてインタビューした。夫々の沖縄音楽に対するスタンスの違いが現れて興味深いインタビューであった。

その後は沖縄の人々との交流と言う事で、那覇市南部の小禄（おろく）にある我が家でミニコンサートを開いた。フィリピンの関係者が小禄の教会に集っているので、その方々にも声を掛けましたが、あいにく教会関係の清掃作業が入り不参加となり、20名ほどの集まりとなった。糸数慶子参議院議員や平良識子那覇市会議員も参加し、伸びやかな歌声を鑑賞した。一品持ち寄り、参加費なしと言う事だったが、逆に豪華な夕食になった。その場で糸数議員が持っているラジオの番組に出演して、歌を披露してもらう事になった。

ラジオ出演では、彼が沖縄環境ネットワークの砂川かおり世話人と一緒に参加した金武町での都市型訓練施設建設反対運動での感想が出され、フィリピンの運動では大きな集まりには歌やダンスがあり、感情を

一致させて雰囲気盛り上げるが、沖縄の運動ではひたすら挨拶が続く。社会運動に歌や踊りの表現を取り入れたほうが良いのではと言う音楽家・詩人としての意見であった。

8月31日の辺野古阻止闘争500日集会は名護市役所中庭で開催され、歌手の生田亘（まんじ）さんとジェスさんが歌を披露した。私は世話人の真喜志好一さんや1坪反戦地主会の新崎盛暉さん、1フィートの中村節子さん、池宮城弁護士等と一緒にバスで参加した。到着が6時45分になり、着いた時は既にジェスの歌は終わっていた。集会が終わり、500人近い人が名護市の中心街をデモ行進した。ラップ調の掛け声にあわせてシュプレヒコールをあげ、ヒンブンガジュマルまで行進した。こんなに大勢の人の基地反対運動のデモが名護市の中心街を行進するのは久しぶりで、市民の反応も非常に良かった。10月末までジェスは滞在するので、今後いろいろな取り組みと一緒に参加できればと考えている。



大阪の民医連メンバーとサンチャゴさん（守る会事務所前にて）



辺野古500日集会のデモ

エコツーリズムでの「村おこし」をめざして

仲西 美佐子（沖縄環境ネットワーク世話人）

恩納村はリゾート観光のメッカであり、年間 250 万もの観光客が訪れる。その最大の売り物であるはずの自然は、いま危うい状況にある。環境教育の必要性が叫ばれ、エコツーリズムのニーズも高まっているが、マスツーリズムの域を出ないものが多く、その内容には疑問が残る。飽くなき欲望の追求による乱開発で豊かな自然が破壊されたように、エコツーリズムの名のもとに、かろうじて残った自然も無くなるのではと気にかかる。

現在巷で行われているエコツーリズムは、地域の自然と関わりのない遠くに住む人が自然を食いものにする観光になっている。それではマスツーリズムとなんら変わらない。保全する側と使う側が一致しないいま、地域の保全の意欲を削いでしまう。使う側はここがただなら次を探し地域には環境破壊の置き土産が残るだけである。

地域で生きていくためには持続可能な暮らしが不可欠で、そのためにも環境保全は欠かせない。環境を保全することが豊かさにつながる。私たちの祖先は資源を最大限に活かし、自然の中で生きる様々な生物と共存して生きる知恵や、自然の恵みを活用して暮らす知恵の結果としての生物多様性など、環境保全の大切さがよくわかっていただと思う。

だからこそ、激しく変化する気象を和らげしのご工夫をして住み心地を改善し、持続的に安全な食料の生産ができるようにして、自然の理にかなった美しい風景を長年かけて作り上げてきたのだと思う。

残された地域の自然を活用してガイドできるように、エコツーリズムの受け皿を地域に作り上げたい。そして、地域の自然を大きく変えることなく、祖先の作った財産や暮らし方を継承しながら残された自然を活用していきたい。そのことを通して環境保全が経済的にも有益であることを実証できれば、環境保全の大切さが共通認識できるとの思いから、エコガイド養成講座を企画実施して3年目になっている。

養成講座に先がけて、私たちは地元恩納村の屋嘉田潟原（やかたかたばる）とそこを取り巻く海岸線の環境を調査してきた。それをベースに、生態系理解のために産学とフィールドの両面で講座を進めてきた。受講生は主婦・パート従業員・プチホテルの経営者・商工会職員、また仕事をリタイアした人などで構成され、体験学習に従事している人もいる。この地域に生まれ育った強みとして、自然に身についた伝統的な暮らし方や自然についての知識はある。その強みを活かして、地域の自然を自然科学的に観察するだけではなく、ここに住んでいる人

が自然とどのように関わりながら暮らしているのかをガイドの主軸にしていきたい。

いま起こっている環境問題は、現在の暮らしが自然の関わりが薄れたことから始まったのではないかと思うので、伝統的な暮らし方を伝えていきたい。その裏付けとしての自然科学や歴史・民族を学習することはガイドに大切なことで、講座によって地域に対する火誇りが増したと思う。「恩納の宝探し」のワークショップでは、突然の変更にかかわらず恩納の素晴らしさを琉歌で表現できるほどであった。

エコガイド養成講座と並行して、エコツーリズムについての講演会を度々開催している。昨今、「自然に接した観光」をエコツーリズムと称するきらいがあるが、そうではないだろう。地域との生活レベルと関連を持たないところにエコは成り立たないのではないだろうか。持続可能な暮らし、それを支える自然、この地に暮らして（暮らすことを選んで）、この自然と付き合う。エコガイドは地域の人でなければならないと思う。

そんなことを一般化するために、これまで様々な分野の人たちを呼んで話を聞いてきた。ドイツ在住の環境ジャーナリスト・今泉みね子氏による「持続可能な観光」、沖縄大学学長の桜井国俊氏による「コスタリカのエコツアーに学ぶ」、南山大学の目崎茂和氏の「沖縄の環境と風水」、北海道大学大学院教授・小野有五氏には3年連続（「ガイドの認証制」「自然と付き合うには」「先住民族エコツアーと沖縄」）で、それぞれ講演をしていただいた。

環境調査、エコガイド養成講座、講演会などの講師の方々や WWFJ（世界自然保護基金日本委員会）の環境保全の思いに支えられて、やがて恩納村エコガイドは誕生することになる。



屋嘉田潟原でのフィールドワーク

2005 年度総会報告

去る 6 月 25 日(土)、沖縄大学にて 2005 年度沖縄環境ネットワーク総会が開催されました。当日は、世話人、監査人、顧問、そして会員の方々も参加され、司会に世話人の後藤哲志さん、議長に同じく世話人の真喜志好一さんを選出し、下記の議案に沿って事務局および監査人よりの報告とそれに対する質疑応答が行われました。

一号議案／2004 年度活動報告 二号議案／2004 年度一般会計報告・特別会計報告・監査報告
三号議案／2005 年度 顧問・世話人・監査人・事務局員案報告
四号議案／2005 年度事業計画案報告 五号議案／2005 年度予算案

質疑応答の内容は以下の通りです。

一号議案から五号議案について事務局から説明（二号議案の「監査報告」については監査人から報告あり）

一号議案「2004 年度活動報告」については質問・意見なく拍手にて承認

二号議案中の「2004 年度一般会計報告」について

「収入」中の「年会費」について、2004 年度に会費を支払った会員の数、団体会員・学生会員・家族会員の数を教えてほしいとの質問あり。

事務局より、2004 年度に会費を支払った会員の数は 460 名、そのうち学生会員は 5 名、団体会員は 11 団体、家族会員は個人と同額で同じ扱いなので総数に含まれるが、5 家族。 他の質問・意見なく拍手にて承認。

「監査報告」については承認

三号議案「2005 年度顧問・世話人・監査人・事務局員案報告」について、質問・意見なく拍手にて承認。

四号議案「2005 年度事業計画案」について

継続事業の項②の「環境影響評価（アセス）法・条例」について真喜志好一さんより補足説明あり。

同じく継続事業の項⑦の「環境政策策定における市民参画のコーディネート」について、「やんばる河川再生協議会」の参加メンバーの立場から、仲西美佐子さんより補足説明あり。

新規事業の項②の「沖縄の環境問題を考える連続講座の開催」について、具体的な内容案に関する質問があり、提案者の川満昭広さんより、

- ・ 年間 6 回の開催を考えている
- ・ 準備期間は 3 ヶ月を予定。内容に関してはこれから詰めていく との回答あり。

その他の質問・意見なく拍手で承認

五号議案「2005 年度一般会計予算案」について

監査人より、収入項目の中の「日本財団フェローシップ受け入れ費」および「調査研究協力費」という書き方は収入の意図がわかりにくいので、「日本財団フェローシップ受け入れ収入」および「調査研究協力収入」と訂正した方がいいとの意見あり。 その他の質問・意見なく拍手で承認

最後に全体に対する質疑応答で、川満さんより、「環境政策策定における市民参画のコーディネート」に関連して、沖縄コンベンションビューローに「環境問題に関する人材育成」という観点から提言すべきとの意見あり。

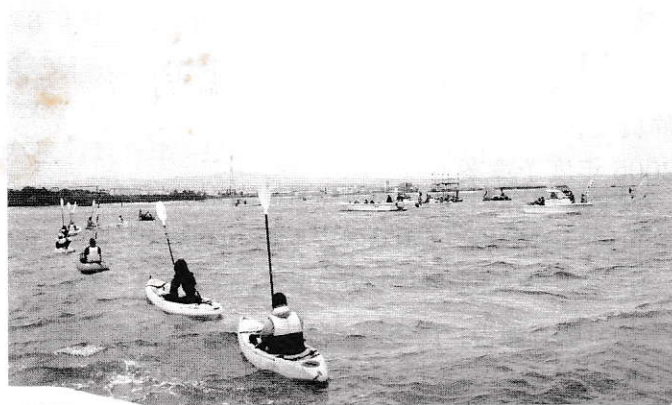
議案に関してはこれで終了

この後、仲西さんより恩納村エコツーリズム研究会の報告があり、無事終了しました。 （文責・編集部）



環境情報おきなわ(2005 年 9 月～2005 年 11 月)

◆引き続き「辺野古にチャーター船を送る」運動へのご協力をお願い



辺野古の海を守り続けるカヌー隊

名護市辺野古では那覇防衛施設局のボーリング調査を阻止するための運動は、この 8 月 31 日でついに開始から 500 日を迎えました。「見直し」案など様々な情報が錯綜する中、闘いは継続しています。

現在「辺野古へチャーター船を送る運動」として継続的なカンパを募っています。その理由として、「船長の人数が増やせる」「漁民の共感を増やせる」「船の運搬・係留・管理の負担が減る」等のメリットがあります。

辺野古への移設を完全に止める日まで、運動はこれからも続きます。皆様のご協力をお願い申し上げます。カンパの振込先は以下の通りです。

●琉球銀行南風原支店 普通口座 331-622 タカミネ チョウセイ

※カンパに関するお問合せは沖縄環境ネットワーク
(098-832-8484) まで。

◆宮城晴子画集

名護市の東海岸の嘉陽で豊かな沖縄の自然と人情の中で暮らす画家の宮城晴子さんが、辺野古の海の美しさを画集にしました。画集を見た山口洋子さんが、手軽な絵葉書にして是非多くの人に見てもらいたいと思い立ち、併せて自然保護の運動基金として宮城さんの了解のもと、沖縄の美シリーズ①宮城晴子作品集海の詩②宮城晴子作品集ふるさとの詩として出版致しました。

●宮城晴子画集「海の詩」(3500 円+税)

問合せ/名護市嘉陽 28 番地 宮城晴子

●宮城晴子作品集 「海の詩」(500 円)

「ふるさとの詩」(500 円)

問合せ/宜野湾市宜野湾 3-11-26

電話 (098) 893-0175 山口洋子

◆新編「消えゆく沖縄の山・海・川」

1996 年に発刊され好評を博した「消えゆく沖縄の山・海・川」の新編です。前回から後の公害・環境問題年表も補足されており、今の状況が分かりやすく整理されています。定価 1500 円。下記までお問合せ下さい。

【問合せ先】： 沖縄学版 TEL 098-854-1620

◆【書籍販売】 郵送します

◎『沖縄の環境と平和』1,000 円

◎『沖縄から世界へ』1,000 円

◎『沖縄型・回分式参加溝のすすめ』500 円

◎『沖縄からコスタリカへ』1,000 円

事務局 (098-832-8484) までお問合せ下さい

◆沖縄環境ネットワーク世話人会 参加自由です!

日 時：お問合せ下さい

場 所：沖縄環境ネットワーク事務所

年会費：個人会員：3,000 円 学生会員：1,500 円

家族会員：3,000 円 団体会員：10,000 円

特別賛助会員：100,000 円

郵便振込先：(口座番号) 02010-9-20132

(加入者名) 沖縄環境ネットワーク



■編集後記■

この後記を書いているのは 9 月 15 日。ご存知の通り、つい先日の衆議院選挙で自民党が圧勝しました。これが沖縄にどのような影響をもたらすのかまだ未知数ですが、今朝の地元紙には「辺野古見直しの本格化」「ヘリ部隊を嘉手納基地へ暫定的に移設」などという案が出ていることが報じられています。そして海上基地建設予定地である「キャンプ・シュワブ」の陸上に建設を移動などというウルトラ C まで飛び出しています。しかし、「県内での移設」という政府の本音は全く変わっていません。それでは本質的な問題の解決はありえないことははっきりしています。

「元首相の橋本氏や小淵氏のように、沖縄に深く思いを致すのを見たことがない」(キャンベル元アメリカ国防次官補)と揶揄される小泉首相が、果たしてどのような対応を取るのか、注意深く見ていこうと思います。(哲)

沖縄環境ネットワーク通信・第 31 号

2005 年 9 月 20 日発行

発 行 〒902-0075 那覇市国場 512 番地

ワタリアパート 106 号

沖縄環境ネットワーク

TEL/FAX 098-832-8484

E-mail/netwind@atlas.plala.or.jp

発行人 桜井 国俊 編集 酒井 哲哉

http://homepage1.nifty.com/okikan/